

学生団体 Jyoto's

池田康大（乾ゼミ3年・学生団体 Jyoto's 代表）

キーワード：SDGs, グローカル, 学習支援

1. 団体概要

学生団体 Jyoto's は、兵庫県姫路市の「城東町補習教室」にて、外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援等を行う学生団体である。2022年7月に設立され、現在8名が在籍している。

具体的に、城東町補習教室では、毎週土曜日に学習教室を開催し、外国にルーツを持つ小学生から高校生までの子どもたちに対する学習支援を行っている。教室に通う子どもたちのルーツは多種多様であり、ベトナムや中国、ネパールなど様々である。また、城東町補習教室では、学習教室の開催に加えてイベントの開催なども行っている。昨年はクリスマス会や姫路城周辺のウォークラリー、雪遊びなどのイベントを実施した。私たち Jyoto's の主な活動内容は、①学習教室への参加②イベントへの参加・新規企画の二つである。

2. 活動への思い

近年、日本では学齢相当の外国人の子どもが増加傾向にあり、公立学校において日本語指導が必要な子どもの児童数は約6万人に上る。さらに、全高校生の大学等への進学率が71.1%であるのに対して、日本語指導が必要な高校生等の進学率は42.2%である。また、全高校生の就職者のうち非正規就職率が4.3%であるのに対して、日本語指導が必要な高校生

の非正規就職率は40.0%である。（文部科学省、2021）以上のデータから、現在多くの外国人児童生徒が日本の教育から取り残されており、彼らへのより一層の教育支援が求められている。また、これらの課題の要因は彼らの学力レベルだけではなく、日本社会への適応能力等でもあると思われる。

実際に、教室に通う子どもたちの中には、日本に来てまだ日が浅く日本語能力が低いために普通中等教育を受けることができない子どもや、日本語での会話に自信がなく学校のコミュニティにうまく溶け込めない子ども、国籍を理由にいじめにあった経験のある子どもなどがいる。ここから、外国にルーツを持つ子どもの中には義務教育の段階で日本の教育システムにうまく適応することができない児童生徒が多く存在し、この問題は先述した進学率や就職率の低さにもつながっているだろう。しかし、彼らは課題を抱えている一方で、この上ない素直さ・可愛さを持ち合わせている。教室に行く顔見知りの生徒が「よっ」というように手を挙げ、こちらに寄ってくる。「先生聞いて！」と1週間の間の学校での出来事を話してくる。「宿題が終わったら折り紙してもいい？あ、やっぱり今日はじゃんけんにしようかな。」とにこにこしながら話しかけてくる。

教室に行き、こうした経験をする度に、私はこのような外国にルーツを持つ子どもたちが取り残されないような日本の社会を創るための活動をしたいと強く思うのである。

3. 活動事例

私たちは、こうした思いを行動に移すため、学習教室、並びにイベントへの参加をしてきたが、今年度の活動の中で最も大きなイベントは、2022年11月に開催した大学ツアーのイベントを企画・実行であった。日本での進路に関する知識や情報等が十分でない外国にルーツを持つ子どもたちに大学という場所について知ってもらい、将来の選択肢の一つの選択肢としてもらうことを目的に、城東町補習教室に通う小学生から高校生までの子どもたち16名を環境人間キャンパスに招待した。クイズに答えながら学内を練り歩き、研究室や実験



写真1 学習教室での活動の様子(2022年6月)

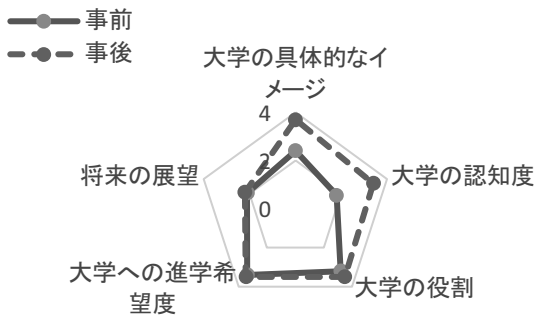


図1 大学ツアー参加前後の大学に対する意識変化



写真2 大学ツアーで講義を受ける子どもたち(2021年11月)

室などを見学した。また、大学生活の模擬体験として、大講義室での講義見学や食堂での学食体験なども行った。その結果、イベントの前後で取ったアンケートでは「大学に行きたいと感じた。」「学びたいことが自由に学ぶことのできる環境があることを知った。」などの意見が見られた。さらに、イベントの参加前後で大学への知識や身近さに関する各項目を四段階評価で表してもらった結果、図1のような結果を得ることができた。

このように、短時間で将来への大きな影響を与えることは難しかったが、イベントを通して大学が身近にあることを認知してもらい、さらにはその具体的なイメージをつかんでもらうことに成功した。そして、本イベントは子どもたちが大学について知るきっかけとなっただけでなく、団体メンバーと子どもたち、また子どもたち同士での交流を深める機会ともなった。

4. 今後の展望

今後も外国にルーツを持つ子どもたちが将来を拓いていくことを支援し続けたい。具体的に、私たちは3月に地元の銀行の支援を受け、キッザニアでの就業体験研修を実施する予定である。大学ツアーの参加者よりも年齢層の低い子どもたちに、日本での職業の幅やその面白さを感じてもらうことが目的だ。このイベントをきっかけに夢を持ち、それが日頃の学習へのモチベーションに繋がるようなものにしたい。

また、SDGsを意識した活動も行っていきたい。社会への適応に困難を抱えるケースの多い彼らにとって、自分は周りの人や社会から受け入れられているという安心感を得ることが、希望に繋がる。これまでの活動を振り返ると、彼らが学習よりも私と話をしたい、一緒に遊びたいと訴えるのは、安心感や信頼感を得たいためである。様々な問題を抱える子どもたちは補習教室に居場所を求め、私たちボランティアをその入口として、安心感や将来に対する希望を少しずつ醸成しているのではないだろうか。そして、安心感や希望は彼らの抱える生きづらさを少しずつほどこき、彼らの生きやすさへと繋がる。この「生きづらさをほどこいていく過程」こそが、SDGsの前文に記されている「誰一人取り残さない」社会を目指すことにつながるのだと考える。人々が抱えている「生きづらさ」は様々で、その生きづらさがほどこけていくきっかけやタイミングも人それぞれである。それぞれが抱える課題をSDGsの17の課題のどれかにあてはめて考えるのではなく、まずはその人の抱える課題の背景を知ろうとすること、そして彼らの生きやすさのために共に努力することが重要である。私たちも、子どもたちの安心できる場所を作る取り組みを続け、誰一人取り残さない社会作りに貢献したい。